

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 津田浩司

津田浩司氏の博士学位申請論文「体制転換期インドネシアにおける『華人性』の諸相」は、インドネシアの地方小都市における「華人性」の諸相を、まる2年間の住み込み調査に基づいて描いた民族誌である。またこの論文は、「インドネシア華人」の歴史的・民族誌的研究を通じ、民族、コミュニティ、共同性についての興味深い理論的考察を行っている。インドネシア華人の研究ではなく、現代インドネシアにおいて「華人性」が立ち現れるさまざまなプロセスと諸相を考察の対象としている点が、本論文の特徴であるが、以下の要旨では煩瑣を避けるため、括弧のつかない華人という便宜上のラベルを用いる。

インドネシア華人の研究は第二次大戦後、アメリカ、フランスなどで展開されてきたが、華人をよそ者と見るインドネシア・ナショナリズムと国家政治の影響もあって、十分に深められるには至らなかった。とくに1966年以降のスハルト支配体制の下では、華人に対する同化政策がとられ学術調査自体がタブーとなっていた。スハルト体制が崩れこの禁が解かれてまもなく、現地華人コミュニティでの長期フィールドワークを行い執筆されたこの論文は、長い研究の空白を埋めるパイオニア的なものである。津田がこれまでに学術雑誌に発表した諸論文はすでに国内研究者の注目を受け、昨年日本華僑・華人学会研究奨励賞を受けている。今後この学位論文の内容が英語その他で発表されるならば、国際的注目を受けるのは必至である。

論文は5章から成る。第1章（「序章」）では、今日のインドネシア国家社会における華人なるものの存在様態が、歴史的背景と共に論じられ、同時に人類学その他の分野における先行の民族・エスニシティ論、共同体論を参照しつつ考察の視座が確定される。先行するインドネシア華人研究に広く言及されており、日本、アメリカ、オランダ、シンガポール、オーストラリアにおける研究が検討されると共に、インドネシアにおいてスハルト体制以前と以後に行われた研究が詳しく参照されている。単に先行研究を羅列したレビューではなく、自己の論の展開に即して諸研究に広く言及し自分の主張を浮き立たせるそのやり方は、優れたものである。

津田はここで、華人なるものが歴史的・社会的に、また国家権力との関係において構成され変転するものであり、華人のおかれた状態とか、華人をインドネシアの他の民族集団

と区別する特徴などが、論の既与の前提ではあり得ないと述べる。こうした主張だけで終わるなら、すでに本質主義批判等として繰り返されているもので新味はない。津田はさらに、日常生活の中に根を下ろした民族誌のなかでこのことを描き出す方法を探り、前述したように華人と言うより華人性に論の対象を絞る。すなわち、そこにある華人を研究するのではなく、華人性が立ち現れるさまざまな場面・プロセスに焦点を合わせ、当の住民たちに華人性が降りかかったり彼ら自らがそれを主張し、実践の中から華人性が事後的に現れてくる様態を描き出そうというのである。この視点は、すでに言い古された感もある本質主義批判や構成主義的民族論を、民族誌的研究の場で生産的に前進させる貢献である。また本論は、第2章以下の民族誌的な描写と議論を通じ、序章に提示された視点を豊かにすることに成功している。理論的・概念的考察と民族誌を書く作業とが、良くバランスを保っている点は賞賛に値する。

本論の第2章は、調査の舞台であったジャワ北岸の小都市で、中国式の廟が、国家の同化主義政策に順応して仏教寺院に装いを変え、その後ふたたび「中国寺院」へと地位を変更するプロセスを描いている。中華廟から仏教寺院への地位変更が、国家の対華人政策、全般的宗教政策の下で、きわめて予想しやすいものであるに対し、それがふたたび民族性を前面に押し出した「中国寺院」に変化する事態はとりわけ興味深い。国家による政策変更がないところで、政策が生み出す磁場への人々の対応の結果、「中国寺院」にコミュニティーの結節点が求められる過程の描写は、民族現象の現れるプロセスを研究対象とする筆者の論を、できごとの連なりによって肉付けする優れたものである。

第3章は、1998年スハルト大統領の支配が崩壊に至る前後の混乱期に、華人の自己防衛組織が成立し、また消滅するまでの過程を描いている。1990年代にはインドネシアの各地で反華人暴動が頻発し1998年にはピークに達する。日常における濃密な交渉だけがあって形をもつ組織がなかった調査地の華人コミュニティーに、静かにしかし急速に自己防衛の組織が出来上がる様は、類例のない興味深い記録である。筆者はさらに、スハルト体制崩壊後社会的政治的な危機が去るとこの組織が自然消滅していく過程を、詳細な聞き取り調査によって明らかにしている。華人性が外部から降りかかり、それが住民によって積極的に客体化され、さらに雪が溶けるように消えていく様を描くことで、筆者は華人性のありようを、説得力をもって提示している。

第4章は、ポスト・スハルト期の政治変革により、国家による同化圧力と華人的文化への抑圧が大幅に除かれた時期の、国家次元の動きとローカルな反応とを論じる。インドネシア国家が定める「国家英雄」のリストの中に、オランダ植民地支配に抵抗した過去の華人の名を加えようという、首都ジャカルタでの動きから、調査地の中国寺院に祀られる18世紀の歴史的人物に注目が集まる。この章では、こうしたナショナリスト的想像力とローカルな住民の意識とのずれが記されている。アンダーソンはその「想像の共同体」論において、対面関係を越えた共同体はすべて想像されたものであるとするが、筆者は、アンダーソンが論じていない「対面関係の共同体」に焦点を合わせ、かつこれと「想像された共

同体」との間に起きる裂け目や葛藤を論じる。それは共同体的想像力をメディアや制度によって固定することの限界を説くものでもある。同時に両者は屈折したつながりの意識で結び合っている。この章は筆者がこうした思考を展開する格好の舞台となっている。

筆者は第5章「終章」で以上を総括し、華人性の、造られたものとしての側面、自己主張される側面、さまざまな関係を結びつつ「生きられる、実存する」側面が、矛盾し葛藤しつつ、華人性が現れるプロセスの中に切り離しがたく存在すると言う。日常の営みは一貫性が無く雑多であるが、それゆえに構造化する力に絡め取られない広がりを持つと言うのである。

本論文はインドネシア地方小都市の華人コミュニティという小さな場の、深いフィールドワークによる緻密な研究であるが、それを通じて筆者は、民族、共同性、ローカル性をめぐるきわめて重要な考察を展開した。これは、人類学と社会科学一般、またインドネシア研究、インドネシア華人研究への重要な貢献である。世界に広がる華僑・華人をめぐるには、異なる専門分野から研究が蓄積され、また今日の中国経済発展の中で社会的注目を集めている。その中で本論文は、コミュニティの日常生活実践からの視点・方法による研究として、国際的に先端的なものである。2年間に及ぶフィールドワークと言っても、その成果には研究者ごとの達成度の差がある。本論文で示された精細でニュアンスに富む情報は第一級のものであり、筆者が人びとに受け入れられ共感し合い、ものごとの深いひだにまで分け入る調査能力を持つことを立証している。筆者はレヴィ=ストロースが独特の意味で用いた「真正な共同体」「非真正な共同体」という対比や、アルチュセールに由来する「呼びかけ」「呼びかけられるサブジェクト」の対比を自分の流儀で転用しつつ、想像される共同性と顔をつきあわせた日常の共同性の関係のいかんについて、重要な問題提起をしている。これを理論的・概念的に深めるのはまだ今後の課題であり、その点では試論と言うべきものである。だが本論文はそれ自体ですでに、文化人類学研究、社会科学研究、地域研究に対して重要な貢献をなし遂げている。審査員一同は、本論文提出者に博士（学術）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認める。